
ゼロの使い魔～ハルケギニア統一に向けて～

浦波

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼロの使い魔〜ハルケギニア統一に向けて〜

【Nコード】

N6834X

【作者名】

浦波

【あらすじ】

ゼロ魔世界の貧乏貴族に憑依した北郷。

環境は最悪だが彼は全く気にすることなく、ハルケギニア統一を目指す。

自分のために。

1 憑依（前書き）

この小説はアンチものです。

原作キャラでも関係なく死にますし、生まれない可能性も高いです。
この主人公は究極の自己中心的性格で外道な事も普通にします。

そいった設定が嫌いな方は読まない事をお勧めします。

1 憑依

気付いたらまた子供に戻ってました。

「……は……またか」

もう既に慣れたので別に焦りもしなかった。

俺の名前は北郷一刀。

もう説明するのは飽きたから詳しい事は前作を読んでくれ。

俺はもう世界を3つ体験している。

一つ目は普通の世界、生まれ育った世界でクソみたいな人生だった。

2つ目は恋姫の世界。

原作キャラをほとんど皆殺しにして超大国を築いた。

3つ目は戦国時代。

超マイナー武将の肝付兼続に憑依して日本統一の後に世界に進出。

世界の半分を支配した。

そして新たに4つ目はこの世界。

ここまで世界を渡り歩いたのは俺ぐらいだと思う。

にしても今回はガキからのスタートか。

前回の世界では確か西暦2000年ぐらいまで生きてたな。
2000年になってから急激に老いだして間もなく死んだ。
遂に寿命が尽きたんだろう。

死因は老衰だったからまあ幸せな死に方かな？

俺の死後、日本がどうなったかは知らないがどうでも良い。

一応晩年には俺がいなくなっても問題無い程の生産能力を手に入れたし、優秀な官僚達がいたからしばらくは保つ筈。

それからは新しい世代が考えれば良い。

500年ぐらい国の発展に貢献したんだ、誰にも文句は言わせない。

前の世界のことはもう良いや。

大事な今は今だからな。

さて、まずは環境のチェックだが。

周囲は森や湖がある自然豊かな環境だが、湖には小さな船着き場や手漕ぎの木製ボートがあることから多分庭園かな？

ということはこの体の持ち主は身分が高い可能性がある。

ただ単純に公園の可能性もあるがな。

しかし遠くの方にデカイ屋敷みたいなのが見えるから庭園の可能性の方が高い。

次に俺の体は背丈や手足の大きさから3歳ぐらいと思われる。

服装は上等な素材だし、恐らく高いと思われる装飾品も身に付けている。

服装のセンスは中世ヨーロッパに近く、文明もそれぐらいだろう。湖に自分の姿を映してみると、そこには茶髪にブラウンっぽい黒眼で顔つきは西欧系の子供がいた。

顔のレベルはそこそこ高いと思うが、それは日本人から見たら高いと思うレベルで、ヨーロッパの中では多分普通ぐらい。

少なくとも凄いイケメンでは無い。

映画で言えば主人公には絶対なれない、エキストラが精々だろう。まあいいさ。

別に顔にこだわりは無い。

元々は太したことが無かったのだし、むしろ前よりは良くなったのだから文句は無い。

それより重要なのは能力だ。

俺には特典なのか呪いなのか分からないが、ある特殊能力があった。それはコピー。

物体ならあらゆる物を無限に複製出来た。

この能力を授けたのは神なのか悪魔なのかは未だに分からないが、これがあったからこそ生きてこれた。

だから能力は何よりも大事なのだ。

しばらく調べた結果、この世界でもコピー能力はあったし、特に変わりも無かった。

それと、前の世界同様、前回得た知識は継承されてるし、紙媒体の物ならコピーで出せた。

この世界は恐らく中世ヨーロッパ時代だから大いに役に立つだろう。

さて、そろそろこの世界について探ろう。

幸いにもこの体の持ち主はそれなりに裕福な家に住んでるらしいし、時代的に多分貴族階級なんだろう。

流石に中世ヨーロッパと思われる世界で平民からのしあがるのはかなりの苦勞だからな。

ガキっぽい演技をしながら情報を得れば良い。

それに何か後ろから使用人っぽい奴等が歩いて来ているから丁度良い。

出来れば現実世界に近いと良いなあ…。

2 悲惨な環境

迎えに来た使用人達に演技をしながら情報を探った所、信じたくない事実が発覚しました。

ここゼロ魔らしいです。

マジかよ……。

ゼロ魔って魔法と貴族の素敵世界じゃねえか。

今まで様々な世界をいったけど、魔法世界は初めてだ。

大丈夫か？ 俺？

ちなみに俺の名前はハンス・フォン・ルドルフ。

ゲルマニアの子爵家の次男らしい。

子爵かよ…。

また地味な階級だな。

父は火のトライアングル、母は土のラインの微妙な一族。

ヤベエ、才能まで微妙だ。

ちなみに長男は13歳でラインになっているのでルドルフ家の期待の星らしい。

だから両親共に長男に期待しているから次男の俺にはあんまり関心無いようだ。

俺になってからも大した会話をしてないし、食事の席でも俺には目もくれずに長男に話しかけている。

普通のカキなら泣いてるぞ？

3歳って一番愛情が必要な年齢だと思うし。

まあ俺には好都合だな。

おかげで俺に変わったのに両親は全く気付かない。

長男も俺にあんまり愛情を感じてないらしい。

すれ違っても無視だし、こっちが話しかけても短い返答だけで直ぐに去る。

マジでこの体の持ち主不憫。

家族からは愛情を全く浴びれてないし、両親の態度からか使用人もあんまり付けられていない。

一応最低限はいるがそいつ等の態度も仕事だからと付き合ってるだけ。

これが現代なら下手すりゃ自殺してるぜ？

絶対マトモな性格には育たねえ。

多分憂さを晴らすために平民に当たる大人になるだろう。
乗っ取っておいで何だが同情するよ。

まあ良いや。

既に消えてしまった人間だし、俺にとっては逆に好都合な環境だから文句無い。

普通に食事は出るし、自室もある、3歳なのに小遣いも出る。特に問題無い。

唯一不満なのは杖を支給されないことだ。

流石に3歳のガキではまだ魔法を習うには早すぎる。

長男だったらまだしも、ロクに注目されていない俺では相手にもされないだろう。

更に不満なのは知識を得られにくい事だ。

3歳で本を読むには早すぎるから本の閲覧許可が降りない。

子爵家と言えどそれなりの数の蔵書はあるが、マンガみたいに3歳児でも分かるような簡単な物は無く、活字だらけの内容が難しいので俺が読むのはおかしい。

製紙技術や印刷技術が低いこの世界では本は貴重品だからしっかり管理されていて読めない。

他のオリ主達ならそんな事は気にせず親にせがみ、見事に読んで天才とか祭り上げられるが、俺は注目なんかされたくないからしない。注目されれば間違いなく嫉妬や警戒心を生み、排除に動く。人間では制御出来ない感情だからどうしようもない。少なくともまだ大々的に動く時ではない、今はちよつと賢い3歳児を演じるしかない。

唯一俺に許される勉強は礼儀作法だけだ。

僅か3歳に理解出来るのかよ？ と疑問だが、腐っても貴族だから執事にみっちり教えられる。

しかしこれが面倒くさい。

本当なら一度教えられれば理解出来るのだが、それでは賢い子と思われる。われてしまうので何回か分からないフリをしたり、飽きたフリをする。

飽きたフリはフリじゃないがな。

だってこれでも皇帝やってたんだぜ？

礼儀作法なんて一通り覚えたから今更復習するなんて面倒なだけだ。

しばらくはこれが続くな。

礼儀作法や貴族らしい話し方、貴族としての態度、平民への接し方等の洗脳教育だ。

内の両親も他の貴族同様、平民蔑視の感情が強く、無礼討ちやとんでもない税金をかけるなど、いかにもなバカ貴族だ。

税金を上げるから経済が発達せず、税収入が減るとというのが理解出来ないのか？

家庭教師からも平民をつけ上がらせないために度々締め付けるべきとか教えられるけど、それが間違いとは思ってもないらしい。

こんな無能に習うのは屈辱的だが今は無力な子供だ。

周囲の環境に溶け込むために貴族の子供らしく振る舞おう。

少なくとも魔法を手に入れるまでは。

ちなみに現時点でコピー出来た魔法はクソ兄貴の魔法練習を見て覚えたレビティション（浮遊）、ロック、アンロック、ライト、ディテクトマジック（探知）などコモン魔法や、発火、ファイヤーボール等の攻撃魔法も覚えた。

ちなみに兄貴の系統は火だ。

だから覚えたのも火が中心。

しかし才能溢れるお兄様は素晴らしい事に土系統も使える。だから練金や固定化も見せてもらった（覗き見）。

これで良い。

ていうかゼロ魔で最強ってこの2つじゃね？

基本魔法の癖に原子配列を自由自在に変えられる魔法と、こういう原理が全く分からないが腐敗や傷を防止する魔法。

マジこれ以上のチートは無い。

これに比べたら虚無なんか無価値だ。

何でこれをもっと有効活用しないのか理解不能だ。

練金を使えば簡単に新物質が作れるし、固定化使えば何千年も変質を防げる。

この2つを有効的に使えば軽く現実世界を凌駕出来る。

なのにこの世界では練金で鉄屑を作り、固定化では食品の腐敗や建物の保全に使うぐらい。

意味分かんない。

現実世界の科学者が知ったらぶちギレそうなくらい宝の持ち腐れだ。

でもこんなに便利な魔法をコピー出来ても使えない。

何せまだ杖すら握った事が無い。

バレれば先住魔法が異端扱い受けるだろうし、100%他の貴族や皇帝に目を付けられて二次小説みたいに利用されるのがオチだ。

利用し合つのはまだ良いが、一方的に利用されるのは虫酸が走る。
だから今は待つ時だ。
いずれ起こす時のために今はバカなガキを演じる。

3 現実 is 厳しい

この世界に come 2 年経ち、5 歳になった。

新たな新事実が発覚した。

どうやらこの世界は原作の 30 年ぐらい前の世界らしい。

色々調べたらトリスティンの国王が生きていてアンリエッタもまだ生まれてないし、ガリアの王もジョゼフじゃない。

これは良いニュースだ。

何せ原作の年では虚無やレコン・キスタ、ジョゼフ、ロマリア、エルフ等の面倒事が一気に勢ぞろいする。

明らかに異常過ぎる程にイベントが目白押しだ。

もしもこんな時代に生まれたら何もせずに原作が去るのを待つしか無かった。

とにかくこれで行動方針は決定した。

原作みたいに虚無が揃う前に、少なくとも虚無の使い手を生け捕るか最悪殺さなくてはならない。

殺すとまた別の奴等が虚無に目覚める事になるが、少なくとも原作の奴等よりかはマシだ。

特に警戒すべきなのは今はまだ王子だがジョゼフ、そしてロマリアのヴィットーリオだ。

ヴィットーリオはロマリア教皇という地位以外は大した危険性はないが、ジョゼフは虚無が無くてモバキヤラだ。

アイツ魔法なんか使えなくても充分チートキヤラだし、オマケにそこに虚無とニョズニトニルン、エルフが付くからまず勝てない。

アイツ間違はなく最強だよ。

むしろ一番主人公にふさわしいかも知れん。

だからジョゼフは早く殺さなくてはいけない。

出来るなら戴冠前に。

それなら虚無に目覚めていないし、継承権争いで弱小だったから守りも少ない。

殺しても継承権争いで暗殺されたと誤魔化しやすいしな。

ジョゼフが死ねば自動的に王位は弟のシャルルが引き継ぐ事になる。

シャルルは魔法は天才的だが王としては微妙だろう。

ジョゼフに簡単に暗殺された事から明らかだ。

シャルルが王位につけばガリアもそこまで恐る必要は無くなる。

精々が諜報組織を警戒する程度で良い。

元素の兄弟とか面倒な奴等もいるが、ジョゼフに比べたら簡単だ。

どんなに強くても所詮は個人。

人間は群れなきや弱い生き物だ。

さて、未来の話も良いが今は現在の話に移ろう。

5歳になったんだからそろそろ杖をねだる。

優秀なお兄様も5歳で杖を手に入れたらしいし、それに倣えば俺が杖を欲しても不思議は無い。

そう思った俺は滅多に出来ない親父の執務室の前に来てノックした。

「…誰だ？」

「ハンスです。お話したい事があります」

「……入れ」

そう言われたのでドアを開けた。

「失礼します」

部屋にいた親父は執務中なのか書類を見たままで俺を見ようともしない。

「何のようだ？」

話しかけるがやはり書類から顔は上げない。

「お仕事中失礼します。

私も5歳になりました。

ですから兄上同様魔法を覚えたいので杖が欲しいのです。

出来れば教師も一緒に」

親子の会話とは思えないな。

上司と部下の会話だ。

「……よからう。

杖と教師は用意する。

もう用は無いのなら下がれ」

「はい、ありがとうございます。

失礼しました」

礼をした後、部屋を出た。

ちなみに親父は終始一度も俺を見なかった。

あそこまで露骨だと逆に關心するな。

まるで自分の子と違っていないような態度だな。

もしかして俺って愛人の子か？

それとも養子？

……まあ良いや。

別に親子の情なんかいらないし。

逆に俺にとっては好都合過ぎて嬉しいぐらいだ。

杖は手に入るし、一応指導員もくれるらしい。

もしかしたらまだコピーしてない魔法を見せてくれるかも知れない。

とりあえずは杖と教師を待つか。

数日後、使用人経由で杖を渡された。

材質はそこそこでやはり期待はしてなくても自分の息子に貧相な杖

を持たせる訳にはいかなからか上等な物だ。

別に杖なんてそこの木の棒でも良いからどうでも良いけどね。

2週間程で杖と契約出来た。

にしてもこの契約は面倒だった。

この2週間杖を手放しちやいけないらしいので食事やトイレ、風呂、睡眠中でも必ず触ってるか身に付けなきゃいけなかった。

ハリーポッターみたいに一発で決まれば良いのに。

契約が出来た頃、俺の魔法指導員も来た。

「初めましてハンス様。

今日からハンス様の魔法を指導するマイヤーです。

ちなみに系統は風のラインです」

マイヤーは下級貴族でルドルフ家に仕えてるメイジらしい。

ここでもお兄様との差が出たな。

兄貴の指導メイジは火のトライアングルだったらしい。

まあそいつは今も兄貴の指導員らしいので俺は別のようなだ。

普通ならこの露骨な差別に憤慨するだろうが俺は歓喜した。

何故なら風のメイジは初めて見たからだ。

ウチの家系は土や火が中心だから風系統の魔法を見る機会が無かった。

これで風もコピー出来る。

「ラインという事はもう1系統使える筈だな？」

「はい、私は風と水のラインです」

最高だ。

まるで誰かから思し召しされたかのような好都合。

でもこれ逆に考えればヒデエよな？

だってさっきも言ったがウチの家系は火と土。

つまり風と水は遠いから覚えにくい系統だ。

もしかしてこれも嫌がらせか？

まあ良いや。

俺は系統どころか多分エルフの精霊魔法も使えるだろうし。

「では先ずはお前の腕前を見せて貰えるかな？
教えを請う前に教師の実力が知りたいのでな」

俺がそう言つとマイヤーは少し不服そうな顔をするが、雇主の息子だから顔を戻し

「かしこまりました。

何をお見せしましょう？」

リクエストを聞いてきた。

「では先ずは基本から一通り見せてくれ」

そう言われたのでマイヤーは風の基本のウィンド（風）、ストーム（竜巻）、フライ（飛行）を見せた。

勿論コピー出来た。

「よし、では次に水系統の基本だ」

マイヤーは言われた通りに水系統の基本であるコンデンセーション（凝縮）、ヒーリング（癒し）、ウォーターシールドを見せた。

「よし、次は応用技や自分が自身がある魔法を見せてくれ。

これで終わりだ」

マイヤーは生徒に舐められないようにするためかウィンド・ブレイク、エア・ハンマー、エア・ニードル、エア・カッター等の風の攻撃魔法で周りの木々にぶつけてなぎ倒すのを見せつけた。

大人気ないねえ。

まあこつちとしては攻撃力が高い魔法やフライやヒーリングみたいな便利な魔法をコピー出来たから別に良いけど。

「分かったありがとう。

どうやら君は素晴らしいメイジのようだ。

これから指導をよろしく頼む」

俺の合格判定にホッとしたのかマイヤーは「ありがとうございます」と言つ。

俺に不採用を叩きつけられたらかなりの屈辱だし、収入源の一つ失うことになるからな。

これで俺への教師代が入る事になるから少し嬉しそう。

先ずは俺が何の系統が調べた結果、土系統だと判明。

やっぱりこの教師はあんまり役には立たないと分かった。

まあ良いや。

コイツの魔法は見せてもらったからもう用無しだし。

とりあえず土系統と分かったから錬金をして問題無い事が分かった。

どこぞのオリ主みたいにいきなりゴールドなんか錬金せず、精々が青銅か不純物だらけの鉄ぐらいだ。

と言っても今すぐ青銅なんか錬金すれば才能ありと見られるからしばらくは自分自身の魔法の才能で頑張る。

自分の実力を上げるのも悪くないしな。

しかし現実には厳しいものだった。

どうやら俺には魔法の才能はほとんど無いらしい。

系統魔法どころかコモンスペルでさえ中々出来なく、レビテーションを成功させるだけで3日もかかった。

これに両親は更に俺に失望した。

元々期待してなかったが、もしかして才能があるのでは？ とほんの少しだけ期待してたらしい。

しかし現実には才能があるとは言いがたい。

自慢の長男はコモンスペルを直ぐに会得して系統魔法に磨きをかけていたというのに、次男は未だにコモンスペルさえ覚えられない。

これで俺の評価は一気に地に落ちた。

今までは微妙に監視されていたが、もう監視の目は無くなった。監視する価値が無くなったから止めたんだろう。

よし、これで鬱陶しい監視が終わった。

あれがあるから今までは演技しっぱなしだったからな。

とりあえず魔法の才能は絶望的と分かった。

残念だが別に問題は無い。

だって普通に魔法を使えば魔力を消費して疲労するが、コピーなら何回使おうが全く疲労しない。

だから問題無い。

魔法はこれからも練習するがそこまで真剣にはやらない。

精々が暇つぶしや演技のためだ。

4 行動開始

更に3年が経ち、8歳となった。

相変わらず俺の地位は低い。

3年前の才能が無い事が発覚した事によりますます俺の存在は空気化した。

以前ならたまに話しかけられる事もあったが、今ではほぼ無い。

両親の関心は長男の事だけ。

偉大なるお兄様はヴィンドボナ魔法学院に入学し、才能をいかに発揮しているらしい。

それに魔法ランクがそろそろトライアングルにも昇格しようというのでますます両親は入れ込んでいる。

きっと卒業したら国の要職に就くか家を継ぐのだろう。

まあでも家を継ぐのは流石にまだだろう。

親父はまだ身を引くには若い。

それに権力が大好きな親父が簡単に譲るとは思えない。

しばらくは居座る筈。

おかげで俺の事には全く無関心だからこれを利用しない手は無い。ようやく馬に乗れる身長になったから乗馬訓練をしている。

この世界では移動手段は馬か竜しかない。

残念ながら竜を所有するのは公爵クラスだから子爵ごときのルドルフ家には無い。

幸いにも前の世界で乗馬を体験してたからこの世界で乗馬のコツを

会得するのは結構簡単だった。

乗馬技術を会得したことから多少の遠乗りを始めた。

ほとんど見向きもされないが、一応子爵家の次男なので何人か護衛や使用人を引き連れて領内を回る事にした。

ルドルフ領は正に中世ヨーロッパな感じだった。

民はボロボロな家に住み農業をしている。

しかし働いても働いても稼ぎのほとんどを税金に取られて悲惨な生活を送っている。

繁華街も店はそんなに多くないし、道は石畳で整備はされているが清掃という概念は無いのかゴミや汚物が転がっている。

改めて見るとヒデエな。

まあ所詮子爵家だからこの程度の経済力しか持っていないか。

領自体はそこそこデカイのだが、未開の地が多いし、オーク鬼や怪物が群生してるから開拓は進んでない。

だから人が住めるエリアは小さい。

これでは人口が上がる筈は無い。

いかにもな家だな。

これならあの優秀なお兄様に期待するのもおかしくない。

あのお兄様が国の要職に就くか、トライアングルになって帰ってくれば開拓も進むだろうから望みをかけているんだろう。

だから相対的に俺の価値が下がる。

ヴァリエール家みたいな大貴族でなきゃルイズみたいな役立たずを愛する事は無かった筈だ。

あれは余裕があつて初めてなる。

ルドルフ家みたいな弱小貴族は役立たずを愛する余裕など無い。

それについてはもう良い。

いかに自分の家が弱小かは分かったが、別に何をする気も無いからスルーだ。

俺が諫言した所で無視されるのがオチだから無意味だ。

それよりも重要なのは俺の自由度が大幅に上がった事だ。

今までは家から離れられなかったから動けなかったが、今は家から出て遠乗りも出来るようになった。

実験として何日か外泊して帰って見たが、何らお咎め無かった。

どうやら本格的にどうでも良いらしい。

よし、計画通りだ。

能力のある子供と思われれば気軽な外泊など出来ない。

だから無能な子供を演じたのだ。

これからすることは下手したら1ヶ月以上帰れない可能性があるからこつする必要があった。

何せこれさえ成功すれば一気に動ける。

失敗すれば他の方法もあるのだがあんまり頭良い方法じゃないし、持続しないから次善策はあんまり使いたくない。

先ずは面倒な護衛やお目付け役の籠絡だ。

魔法指導員のマイヤーも連れて遠乗りをした。

名目は実戦を経験させる事によって才能が開花するかも知れない。

実際はコイツも取り込むためだ。

オーク鬼討伐のためにかなり遠く出て、キャンプを張った。

そして食事時に俺特製のワインだと振る舞った。

護衛や使用人、マイヤーはそのワインを「こんな美味しいワインは飲んだこと無い」と喜んで大量に飲んでいた。

そのワインの中には麻薬が含まれている事も知らずに。

麻薬は練金を使って簡単に出来た。

原子配列を操作出来るんだから麻薬の化学式や製造法等を全て知っている俺には簡単に作れた。

オマケに原子配列を弄るだけで作るから純度100%の超極上品がいつも容易く出来た。

にしても他のオリ主はどうやって金やチタン、ステンレス、火薬、ガソリン等の化学式を知ったんだろう？

俺みたいに特殊な環境下に生きてきたんならまだしも、普通の学生や一般人が知ったとしても覚えていられる筈は無い。

そんなもの日常生活に何の役にも立たないからな。

オリ主達は皆理系の大学や大学院卒業者なら分かるがな。

少なくとも高校生が知ってる訳は無い。

このように度々実戦経験を積むためという名目で麻薬入りワインをガブガブ飲んだ結果、全員見事なジャンキーとなった。

今では俺の命令には絶対服従だ。

麻薬がもたらす快感の前では全てが無意味だ。

全員をジャンキーに仕立てた後に本当の実戦を始めた。

コピー能力を知られるのは不味いから一応杖を構え、呪文を詠唱しながらコピーでファイヤーボール×10などともない威力の魔法をオーク鬼に放つ。

そのとんでもない威力のせいで30匹以上いたオーク鬼は一気に吹っ飛ぶ。

その光景を見ていた護衛達は啞然。

今まで才能などないと思っていたガキがスクエア以上の魔法をかましたんだから啞然としてもおかしくない。

オーク鬼が全滅した事を確認した俺は護衛達に振り返り

「いいか、今見た光景は誰にも喋るな。

もし誰かに喋ったのなら喋った奴は勿論、聞いた奴や喋った奴の家

族も皆殺しにする」

俺の言葉に護衛達は青ざめる。

何せあんなとんでもない力を持った奴に殺すと言われたんだ。戦っても勝てる筈ないし、誰かを味方につけても敵う訳が無い。

「念のために言っとくがこの事を知ってるのはお前等だけだ。

だからもし漏れたりしたら例えお前等が何にも関係無くても俺はお前等が漏らしたと思う。

そうなたらお前等は勿論、お前等の家族や親戚も皆殺しにする。

…分かったか？」

「………はいつ、分かりました！！！！！！」

全員何故か敬礼しながら答えた。

これで駒の完成だ。

もしも喋れば自分や家族、親戚さえも皆殺しにされてしまうというムチと、麻薬の甘美なアメ。

これでまず裏切る事は無い。

何せ裏切れば家族諸とも殺されるし、万が一助かったとしてももう麻薬のとんでもない快感を得られなくなる。

リスクの割にはリターンが少なすぎる。

だったらここは従い、アメを貰えるように頑張るのが人間だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6834x/>

ゼロの使い魔～ハルケギニア統一に向けて～

2011年10月20日20時13分発行